
デザート

如月春花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

デザート

【Nコード】

N1081E

【作者名】

如月春花

【あらすじ】

一人暮らしの隼人。そんな彼に私は手料理をごちそうすることにしました。

違う、私はこんなつもりじゃなかったのに。

「な、まだ出来ないの？」

とんとん、と包丁を動かす私の手元を覗き込みながら隼人が聞いた。嬉しさを全面で表した表情はまるで子供のようで。思わず私は笑みを漏らした。

「まだ、もうちょっとだから待って？」

“ね？”とお願いすると、隼人は不満そうにはーい、と返事をする。とキッチンから出ていった。後姿が本当に残念そうだと思う。笑ってしまう。

今、私は一人暮らしで毎日不健康な食生活を送っている隼人のためにキッチンに立っている。

毎日毎日カップ麺とかそんなもばっかり食べている隼人の食生活が前から気になっていたのだ。

料理はそれほど得意じゃないけれど、それでもカップ麺よりはましだと思っ。

料理を作る、と隼人に提案したところ隼人のバカみたいに盛大な拍

手と共に料理を作ることが決定した。
そして今に至る。

「なー、まだ？」

さつき出ていったかと思ったらまた戻ってきて同じ質問。

…さつきからまだ5分と経ってないんですけど。

呆れた口調を隠すこともなく私は言う。

「まだだつてばー」

「後どれくらい？」

「ちよつと、邪魔しないでよー」

隼人に後ろから抱きつかれる。

隼人の温もりを背中を感じて幸せ気分。

けれど今は料理中。

目の前には後少して完成の料理が待っている。

幸せ気分浸っている場合ではない。

隼人の温もりに流されそうになりながらもそれをふりほどいた。

「・・・暇。」

むう、と不機嫌そうに駄々をこねる隼人。

…子供じゃないんだから。

私は小さく溜息を吐くと暇を持て余している隼人のために急ピッチで料理を進めたのだった。

「隼人、出来たよー」

料理の邪魔でキッチンから追い出した隼人へ呼びかけると嬉しそうな顔で駆け寄ってきた。

子供じゃなくて最早犬のレベルかもしれない。

そう思いながらもそんな隼人が可愛くてついつい微笑む。

「おおーすげえっ！」

喜々とした様子の隼人に料理の乗ったお皿を手渡す。

「これあつちまで運んでくれる？」

「ん、了解」

隼人は頷くと両手にお皿を持ちキッチンを出ていった。

私はお箸を食器棚から出して後に続く。

部屋に入るとそこにはもうすでにテーブルに料理を綺麗に並べて私を待っている隼人の姿があった。

「早く食おうぜっ」

そう隼人に急かされて私は隼人の向かいに座る。

隼人にお箸を手渡すとさっそく隼人は両手を合わせ。

「いただきます。」

待つてました、と言わんばかりに料理を食べ始めた隼人。

料理がそんなに得意じゃない私は、自分の料理に手をつけることも忘れて隼人の様子を見守る。
おいしいかな？…結構ドキドキする。

「…美味しい、すげーマジ美味しい！」

美味しくなかったらどうしよう、そんな不安を抱えながら見ていた私は隼人のその言葉に一安心した。
そしてようやく安心して自分も食べ始める。
……うん。味、悪くはないみたい。

「絶対いい嫁さんになるって。」

につこりと微笑んだ隼人の言葉が嬉しくて私も微笑んだ。
すると隼人は急に何かを思い出したような表情で私を見つめてきた。
何だろう、と私は首を傾げて疑問を表す。

「もちろん俺の嫁さん、な。」

…恥ずかしげもなくよくそんなことが言えるね、とかそんなひねくれが口から出る前に私はだんだん顔が熱くなるのを感じた。
きつと顔は真っ赤に違いない。

そんな私を見ていたずらっぽく微笑んだ隼人。

……私で遊んでるな、この人は。
ってか隼人のお嫁さんとか……！さらっとプロポーズ？

なんて悶々と考えていたら結構な時間が経っていたらしい。
もうすでに食べ終わったらしい隼人が向かいから私の隣へと移動してきた。

「…どうしたの？」

いきなりの行動に隼人の真意が分からなくて問う。

「デザートは？」

…えー。ご飯作ってあげたのにデザートまで催促ですか。
呆れた私は隼人に向かってさよならするみたいに手を振った。

「ないよ、って言うかご飯作っただけでも有り難いとおもってよねー」

ぶつぶつと文句を言ってみたところでたぶん隼人の耳には届いていないのだろう。

今だってまた何か考え込んでるし。

…かと思えば満面の笑みで私を見る。

…… すごくおく嫌な予感。

「仕方ないなあー」

そんな笑顔で言われても顔と言葉が伴ってませんけど。

とか皮肉めいたことを考えた直後、私は隼人に抱きしめられた。

「…何してんのよ。」

「んー、デザート貰う」

私としっかり目を合わせて隼人は私にキスをした。

「…なっ。」

「ごちそうさまでした」

小首を傾げてわざと可愛らしく言った隼人。

…なんかおもしろくない。

全部が隼人の思うようにいきすぎてる気がして私は隼人に仕返しするようになんかキスをした。

「ごちそうさまでしたっ」

隼人がしたみたいにおもいつきり小首を傾げて可愛らしくなるように言つと隼人ががばつ、と抱きついてきた。

「わっ、何っ！」

「・・・ついだから全部いただきまーす」

「全然ついでじゃないから！しかも私まだご飯食べきってない！」

「…だめ、止まんない。」

一言反則でしょ、っていうくらいの男っぽい声で呟いた隼人に私は結局抵抗しきれなかった…。

…愛する人にご飯を作る時はデザートも忘れずに？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1081e/>

デザート

2010年11月17日10時25分発行